

金責め女兒選挙！



玉子王子著

一章 玉責め女兒と逃げ場を奪う爆乳教師

海山小学校、四年教室。

月曜日の昼休み。

駿はパタンとノートを閉じる。

——また始まった、腐れおマンピーどもが……

女兒たち。四人ほどが、男子一人を取り囲んでどこかに連行していく。

女兒はニコニコ、男子は眉をしかめる。と、さらわれていく男子が急に何か叫ぶ。

「海でも山でもどっちでもいいだろうが！ この玉無しクソ人間どもっ！」

酷い発言。だが、女兒らは満面の笑みを浮かべる。

「あらら〜？」

「これは取り消せないよ？」

「これついてりや偉いの？ これついてりや偉いの？」



「はふっ！」

ぺむっ、と、男子の股間に手で作ったカップを叩き込むのは一際楽し気な笑顔の女兒。

健康そうな小麦色の肌。大人だとガサガサしてきそうな日焼けだが、日焼けしようが何しようが若い肌は艶々だ。

髪は肩までのショートボブ。

「や、やめっ」

「きゃはは！ 由香やっちゃえ！」

「玉無し仲間にしちゃえ！ 玉無し仲間にしちゃえ！」

男子にしがみついた女兒たち。身動き取れなくして、由香が金カップ。手首のスナップを生かしてぺむぺむぺむ、優しく、力も弱くみえる。

だが、男子の顔を見上げる由香の顔は、はっきりと理解している顔だ。

「えへへ、こんな攻撃でも効いちゃうぐらい、タマタマは痛いんだよね～？ タマタマは痛いんだよね～？」

男の急所の弱さを、心底理解していた。さらにその上、男に自分の弱いところをしっかりと意識させる煽りまでかましてくる**熟練女兒**。

当然、男が耐えられるわけがない。

「わ、わかった！ 海、海に入れるからっ！」

「きゃ、ありがと～」

「男落すにゃ、やっぱり金の玉だよね！」

一件落着、とはならない。

別の女兒集団が近づいてくる。

先頭は成瀬玲。肩より長いストレートの髪。ただのTシャツにスパッツなのに彼女が着るときっちりしているように見えてくる。

——やっぱりこうなのか。

内心ため息の駿。同じ男子仲間が女兒らによって男の苦しみを味あわされているが、何もできない。ヘタに出て行っても巻き添えだ。みなそう思っているようで、男子らは目をそらしている

逆に女兒らは小柄な体からあふれるほどウキウキした喜びを見せつつ、熱視線を送っていた。

お互い目くばせしあい、肩を叩き、スマホを向ける。本当に楽しいイベントらしい。

玲が股間を押さえる男子に冷静な目を向ける。

「ねえ、海に入れるの？」

「いや、まあ……あつ」

素早く、玲の周りの女兒が男子の腕をとる。必死で膝を締める男子だが、玲の細い手が隙間に入り、明らかに何かをむんずと握る。女兒にはないなにかをむんずと握る。

「ねえ、海に入れるの？ 山に入れてほしいなあ？」

「山に入れる！ 山に入れるからっ！」

「あ、こいつ！」

「玲ちゃんどいて！ 今度は私がキ○タマ潰す！」

由香が目を輝かせる。

ため息をつく駿。

と、玲が見てくるのに気づく。

「駿くん、何か？」

「え、いや、その……」

横の女子が立ち上がる。高井真琴。家も隣の幼馴染。ふっくらした頬でショートカット、赤っぽい髪だ。

「駿くんは、私の味方だもんね？ 山派だもんね？」

「あ、ま、まあ……」

「へえ、じゃあ海には入れないんだ？」

反対側の女子が立ち上がる。浜田葵。丸眼鏡の小動物っぽい雰囲気の子。しかし、男子の間では前から恐れられていた。容赦なき急所攻撃の使い手として。別名、**玉潰しの葵**。

「これは教育やろなあ」

「あ、あは……」

「キ○タマに教育やろなあ」

「く……」

——そもそもこいつだ。こいつが票を分捕るためにキ○タマ責めをしだしたから、女子全体にそれが広がっちゃった……



葵が、指で輪を作る。二個、それをスパッツの平らな股間にあてがう。男にとってその仕草は自分についている二つの臓器を連想せざるを得ない。

——女なら「あれ、何だろう……あ、キ○タマだ！」ってなるけど。男ならもう、自分にぶら下がってるから明らかに瞬時に気づく。それをわかってて、あいつもやってる。煽り慣れてる。クソ、何が玉潰しの葵だ。

頬が熱くなるのを感じる駿。その頬にしっかり目を向けてから、にんまりする葵。ガニ股になり、指リングを動かす。

「これだよこれ！　これを、狙い撃ち！　痛いんだろうな～タマタマ！　嫌なら海に入れてよ！」

周りの海派女子がそうだそうだ、と囁す。

横の幼馴染が肩に手を置いてくる。

「駿くん負けないで！　負けたら……」

足。少し上げて振動させる。

「電気あんまでタマタマ潰しちゃうぞ？」

縮む。玉竿が。平時でも一五センチを超えるクラスーの大物が。

——ほかの男子はまだしも。俺にとってはこいつが……物心ついたころから、こいつに俺の玉は玩具にされてきた。何度電気あんまされてきたか……

一緒に寝ていて、突然股間に違和感を感じて起きたら両足を掴まれており、陰囊踏み潰しを食らう。

風呂で、お互い電気あんまやろうなどと、**明らかに不公平なやり取り**を強要されることも多々あった。

——玉ある人間と玉ない人間の電気あんまなんて、明らかに全然別もんじゃねーか。それを公平みたいな顔でこいつは……こいつだけじゃない、女子全般だ。自分に玉がないのをいいことに、一方的に玉狙って票入れろ票入れろって……

「やってらんねえ。お前ら同士で話付けろよ……」

つい口に出す駿。

女兒らが顔を見合わせ、肩をすくめる。

代表のように、幼なじみ真琴が口を開く。

「はあ……駿くん、もう女子同士の話し合いは終わってるでしょ？　女子一四人、しっかり七人ずつに分かれてるのよ」

「そうそう。で、女子の意見変えさせるのは難しいからね。だって私ら……ついてないから」

パン、と自分の股間を叩く小動物葵。金的攻撃という**必殺の牙**を持つ小動物だ。

パンパンと、遠慮なく自分の股間を叩く。

わかっている。

その動きを見せると、男子が「自分にはそれは無理だ」と思い、急所の弱さを嫌でも自覚させられることを。

「私らは、男の子よりずっと弱いけど……その代わり、うふふ、神様が特別にいい技を使えるようにしてくれたの。それが……キ○タマ攻撃！」

指リング二つ。頭上に掲げる葵。

「これからも、海に入れない子にはキ○タマ！　キ○タマ攻撃しまくるからね！」

「なにを！　山に入れない子は、タマタマ無くなると思ってよ！」

真琴が飛び跳ねると、山派はもちろん海派も女兒は爆笑。

もちろん睾丸を潰すなど冗談だ。

だが、万が一潰れてしまっても問題ないと思っているのは感じられた。

この世界はナノテクノロジーが発達しており、一粒飲んただけで頭が半分吹っ飛んでいても治せる薬がコンビニで安く売っている。

だから睾丸など潰れても構わないと女兒らは考えているようだ。

これが潰れらお終いの世界なら女兒らの親も急所攻撃は絶対にダメだと教えるし、教師たちも止めるだろう。

だがあっさり治るなら、そういう倫理は極めて緩くなる。

それでも男ならまだ止めるが、今の駿たちの担任は三五歳爆乳熟女。当然睾丸がないので、治るならいいだろうと考えている。女子生徒らの**剛腕選挙戦術**を甘く見ている。

いや、正確には当然分からない話だが、少なくとも、駿にはそう見えた。ろくに止めないのだからそうとしか見えない。

——っていうかそもそも、ババアが海か山かどっちかに決めりゃいいのに、面倒だから生徒に決めさせて……そのせいでこんな事になってんだぞ。**やっぱりマーンはクソ、はっきりわかんね。**

「あがっ！」

叫ぶ駿。ぼんやり思考している状況でも、金的を受ければ即座に意識はそちらに持っていかれる。

ヘコ、と自分でも驚くほどの速度で腰を引く。考えごとの途中でいきなり攻撃されても、何が起きたのか一瞬でわかる。

睾丸は神経が集まっているのでそこをやられると脳天を刺激が直撃する。

睾丸は腹膜に包まれているので、腹をやられたと誤認し、腹膜が縮まって内臓が締め付けられる。

そして股間を押し潰す感触。下を見る駿。駿の股間を押さえている葵、金カップ。痛みと恐怖で睾丸二つ引き上がる。袋が縮む。

そのまま放さず、ギュ、と握ってくる女兒の手。

顔を赤らめ、舌をぺろりと出す丸眼鏡の葵。

「きゃは、やっぱり駿のキ○タマ大きい！ 握り潰しやすいよ～」

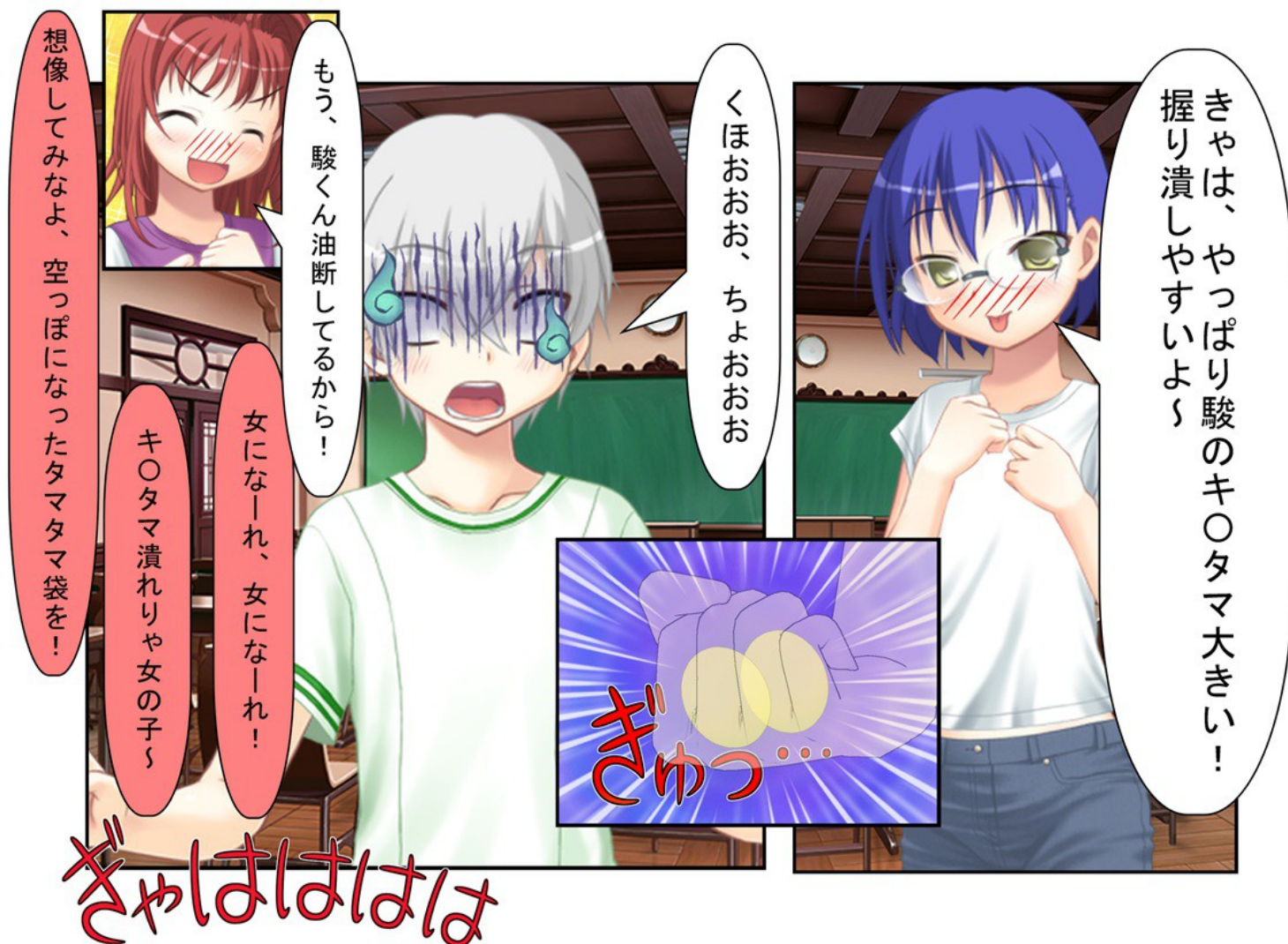
「くほおおお、ちょおおお」

「もう、駿くん油断してるから！」

「女になーれ、女になーれ！」

「キ○タマ潰れりゃ女の子～」

「想像してみなよ、空っぽになったタマタマ袋を！」



睾丸を握られてるときに一番言われたくない台詞を的確に吐く女兒たち。

キャッキヤと楽し気に、いつの間にか駿の周りを囲んでいた。

「ちょ、ちょ、ちょ……」

まだ強くは握られていない。それでも爪先立ちになってしまう駿。

周りを見る。先ほど、駿も仲間を助けなかった。

仲間たちも、駿を助けられない。

目をそらす男子たちは、八人。駿を入れて九人。

この票を、どれだけ引き込むかで来月の合宿の行き先は決まる。

投票は一週間後。

といっても日曜は休みなので、選挙は土曜日だ。

——クソっ、土曜日でも学校や仕事が休みの**ガ○ジ政策が実行されてる世界線**ならこの不毛なやり取りも金曜日までで済むのに……

今日はまだ月曜日。

先は長い。何度玉責めで投票先を変えさせられることか。

唯一の救いは、誰が何に投票するか分からないので、見えないところでなら「そっちに入れる」といえることだ。

というか、それが反対側にバレないことだろう。

「ちなみに、駿どっちに入れる？」

「海に入れさせてくださいっ！」

「いい態度ですにゃ〜、キ〇タマ握ると男の子は優しくなってくれるね！」

葵、モミモミと小さな手に余る駿の股間の巨肉を揉み解す。

表情は、屈したんだ？ と煽るような八の字眉毛に上がった口角。

——し、仕方ねえだろ、玉握られたら……相手が女じゃ、握り返すモノもないんだ。

葵が放す、と入れ替わりで幼馴染真琴。

「あ、はうっ！」

「はい、駿くんはどっち派よ？」

グニグニと、勝手知ったるという感じに的確に睾丸を蠢く指で刺激してくる真琴。逆らうとそこに害が及ぶことを認識させるための玉揉み。

頬が引きつるのを感じつつ、何とか笑顔を作る駿。

「山で〜す！ 山に入れる！」

いうと、今度はもちろん葵が再び出てくる。いや、由香も出てくる。

「おいおい！ 裏切んな腐れタ〇キンが！」

「今度は私！ 私が駿のデカキ〇タマ握り潰す！」

「ちょおおお！」

海派山派が交代で玉を握ってくる。もはや交代で玉潰しされているだけに近い。

始めは掴んで投票先を聞いていたが、徐々に始めから握り潰しをしてくるようになる。

「はい、次私！ ほれ一、急所をゴリゴリ、急所をゴリゴリ〜」

葵。やはり他の女兒とは格が違う、小さな手で、しっかりと玉袋の根元を掴んで玉を逃がさず袋の先に追いやって睾丸を圧殺してくる。恐怖と苦痛で汗が噴き出す。

「ふんぐううう！ と、投票っ、投票うううう」

「え？ 投票が何？」

「葵ちゃん、投票させるために握り潰してるから！」

「あ、そうだった！ それじゃ、海に入れる？」

「入れる入れる入れる入れる」

「じゃ、ご褒美に玉潰してあげるね！」

「やめえええ！」

「ぎやはははは！」

唾を飛ばし、バシバシ股間を叩く女兒たち。もちろん自分のだ。それで男子への威嚇になるとわかっていて。そんな自分たちにとっては何でもないことが男子にとっては恐ろしいという差異が面白い、と感じているようだ。

そんな女兒らが、交代で玉握り。

というと他人事のようなのだが、握られるのは駿の睾丸だ。

両腕を別の女兒に掴まれて腰にもしがみつかれて身動きできず、常時爪先立ちだが、握られる瞬間はさらに強く立ってしまう。少しでも逃れようと。

もちろんそんなもので逃げられるわけもない。

それを、ゲラゲラ笑い続ける女兒たち。

——これだ、これなんだ。こいつら、別に合宿先なんて海でも山でもいい。でも、玉責めが面白くなってきたから、選挙のためという大義名分で金責めしまくってくるんだ。で、盛り上がったらこの通り、口実を忘れる……

それでも、まだいい。運悪く今のように挟まれるというか、皆がいる場所で玉責めを食らうと反対側の女兒もいて、両派をたらいまわしにされるような形になる。

だが、始めに由香がやろうとしていたように、他所に連れて行って翻意を促す形なら一様は行ったり来たりの形にはならない。

誰がどちらに入れるつもりなのかは、細かくは確認しようがないのだから。

それが唯一の救いだった。

と、教師が入ってくる。

爆乳。揺れる。

そういうと上下運動を思い浮かべるが、一定以上巨大だと前後の運動も出てくる。

小さいと胴体と一緒に動くが、ある程度大きいと本体に遅れるような動きも出てくるのだ。

遅れて、胴体に押されて前に。

同時に上下運動もしているので、結果は激しい揺れとなる。

爆乳女教師、年齢は三五歳。一〇歳から九歳の生徒らから見るとはるかに年上の親世代だ。

「みんな、今日は選挙の事でお知らせがあるよ」

そういうと、選挙結果にはあまり関心がなくとも、選挙自体には関心がある女兒らもさっさと席に戻っていく。

左右を丸眼鏡の葵と幼なじみの真琴に挟まれていると安らげないが、とにかく座れるだけましと思う駿。

——先生のおかげで、助かった……

股間を押さえ、グネグネと腰をねじる。

黒板は二つある。教師の机の前の小さなものと、授業に使う大きなものだ。

その小さい物を左右にチョークで分ける女教師。

「皆頑張って選挙運動してるけど、今の状態だとよくわからないでしょ？　そこでこうやって……」

右に山、左に海と書く。

そして、生徒の机の列に人数分の紙のカードを配る。

「それに名前書いて、今どっちに入れるつもりなのかこの黒板に張ることにしよう。そうすればわかりやすくなるでしょ？」

いいアイデアだといわんばかりのドヤ顔。

息がつまるのを感じる駿。

周りを見る。男子は似たような感じで、身動き取れない者も多かった。

女子たちは「おお」と歓声さえあげていた。顔を見合わせ、頷き、手を叩く。

「先生、それ面白くなると思いますっ！」

「でしょ？」

喜ぶ女子たち。

震える男子たち。

駿は、その状況がはっきりと理解できた。

両者とも、同じことを考えているだろう。

これで、選挙は今まで以上に盛り上がると。

同じことを考えているが、それによる結果が全く違うので反応が違うのだ。

全く違う男女の反応。

その差を生むのは、ただ、足の間。

そこに弱点がぶら下がっているか、いないかである。

と、横の葵と目が合う。

にやあ、と笑う葵。椅子をずらし、スパッツの股間が見えるように動き、股間を指さす。

自分の股間を指さす意味はなさそうだが、言いたいことは伝わる。

——俺のそこが、大変なことになるぞ、という煽りだ……こいつ股間ネタで煽ってばっかりだな…
…さすが玉潰しの葵だ。

教師のありがたいアイデア。

それによって、どっちに属しているか分からないのをいいことに裏で両者に入れるとっておく、
という手が使えなくなった。

更なる玉責め地獄が始まろうとしていた。

体験版終わり

この後駿は当然のようにしつこく女兒たちにタマタマ責めを食らい続けます。

巨根賞賛系C F NMのネタもあり。

さらにボーイッシュロリにお風呂で玉潰ししてもらう展開もあり。

続きは製品版でぜひお楽しみください